

古代文字資料館所蔵の満文印

吉池孝一

1. 資料紹介

当館には「満洲文字による満洲語」の印がある。印面の縦は38.60mm、横は38.86mm、重さ94.5g、高さ32.33mm。満文は、印面と、背面の右側、の二カ所にある。以下、印の全景と印面の画像、背面の満文と朱色押印の満文の画像を示す。



全景



印面



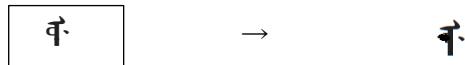
背面の満文



朱色押印

2. 資料の質について

この印は、しばらく前より資料館で管理していたものであるが、公開するには、ためらいがあった。先ずは、朱色押印を見て頂きたい。左行の先頭の文字が奇妙なのである。この文字を母音の *a* とすると左に突き出た二番目の線が太すぎる。線ではなく三角形のように見える。なによりも右の点が不要である。右の点を活かすとなると *u* と読むしかない。*u* であるとすると三角形の中央に空白がなければならないが、印面を見る限り空白はない。もっとも、朱色押印を見ると三角形の右寄りに、朱色が無い“白い部分”がある。この白い部分だけでは *u* とするには不足であるが、*u* と見ることも不可能ではない。このような字形をどのように理解するか。あるいは、溶かした金属を型に流し込む際に、下記のように三角の中央部が塞がるという不都合が生じたのかもしれない。そのような拙い字形であっても、満洲文字を使用する習慣が薄れた頃に作製されたものならば見過ごされるということはあり得る。



以上のように不審な部分があるため、これまで紹介を控えていたが、あることを契機として考えがやや変わった。印鑑から話は離れるが、貨幣は同一のものを多量に作るために、その銘文は比較的念入りに検討され拙い字形や誤りは他の文字資料に比べて少ないと認識をこれまでもっていたところ、最近『新疆紅錢大全圖說』（中華書局、1996年）を開く機会があり、場合によっては、その認識を改める必要のあることを知った。貨幣の満文の銘文を見たところ拙い字形や誤りが多いのである。おそらく、新疆という中央から離れた地域では、役人たちにおいて、満洲文字の使用の習慣が薄れ、そのため、さまざまな変異（別の言い方をすると誤記）が生じたのではないだろうか。

文字についてはこのようなことであるが、満文の表現自体は参考になるかもしれないと思い直し、このたび満文資料の一つとして紹介することとした次第である。押印の左行の先頭の文字を、*u* の拙い写しと見なすならば、なんとか意味をとることができそうである。

3. 印面の満文

印面は陽刻の満文である。それを紙に捺した朱色押印の左行を *ujikini* と読むことにする。動詞 *ujimbi* は、福田昆之(1987)に「養う、哺育する、世話をする、司る、助命する。」とあり、河内良弘等(2002)に「養う、育てる、生かす」とある。*kini* は動詞の接辞で、福田昆之(1987)に「(1)強い意欲や願望を示す。…してもらいたい。…するように。(2)命令や要求を示す。…しておけ。…するように。(3)許容ないしは無関心を示す。…しておけばよい。…させておけ。…でもかまわない。この形式には付属語-oが接尾しうる。…しておこうか。(4)意志および提言を示す。…しよう。…してやろう。(5)自虐的な推量を示す。…するだろうよ。」とあり、津曲敏郎(2002)に「話し相手や第三者に対する話し手の希望「～するがいい」や許容「～させておけ」を意味する」とある。これを参考にするならば、*ujikini* の直

訳は「養育するがいい」「育つように」ともなろうか。押印の右行に jui de とある。jui は「子」、de は与位格語尾である。jui de の直訳は「子において」ともなろうか。満文全体の ujikini jui de は、文脈を参考にすることのできない二つの綴りより成っており、成語などの熟した表現でもない限り（手元の辞典には見当たらない。ご存知の方が居られたらお教え願いたい）、このようなものを納得のいくように解釈するのは困難であろう。しかし、少なくとも、子の成長への願いが含まれているように見える。そこでとりあえず試訳として「健やかであれかし！ 子において」とでもしておきたい。なお、漢文風に右行から読むのかもしれないとのご指摘をある方からいただいた。なるほど、あり得ることである。

なお、ujikini ではなく、仮に ajikini としたならばどうであろうか。ajimbi という動詞は無いので不可である。acikini としたならば、acimbi という動詞はあるが「(1)揺れる。微動する。軽く動く。かすかに動く。(2)荷を負わす。荷を積む。荷を載せる。荷駄をつける。(3)荷作りをする。」(福田昆之 1987) であるから、やはり意味の上で不可である。

4. 背面の満文

背面には、印を使用する人物の名を書くのが自然であるから、先ずはそのようなものを想定して作業を進めるのが穩当であろう。綴りは明瞭でないが、陰刻で galime あるいは galame とある。

galime であるとしたら、母音 i が短いのではないかとの指摘もあるが、gali と読むと「怜俐な、聰明な」(福田昆之 1987) であり、名前として都合が良い。もっとも、me の用法として、形容詞や名詞に付くものを知らない。この点は不審ではあるが、あるいは galime で「聰明なる者」というような意味の人名を示すものであるかもしれないと想像している。

他方の galame であるが、動詞 galambi は「天気が晴れる。空が晴れる。晴れる。」(福田昆之 1987) である。me は、河内良弘等(2002)に“語彙的接尾辞”として「-me: ulembi 真直に縫う → ul-me 縫針」(112 頁) のような例の紹介がある。あるいは galame で「晴れやかなる者」というような意味の人名を示すものであるかもしれない。

5. 最後に

以上、資料を紹介するついでに、印面と背面の満文の訳を試みた。これらの満文をどのように解釈したならば正解となるか、諸氏のお教えをいただければ幸いである。

〈参考文献〉

- 福田昆之(1987)『満洲語文語辞典』横浜:FLL
杜堅毅・顧佩玉(1996)『新疆紅錢大全圖説』北京:中華書局。
河内良弘・清瀬義三郎則府(2002)『満洲語文語入門』京都大学学術出版会。2017 年第四冊による。
津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』東京:大学書林。